人新世を耕す　帯広畜産大学　筒木潔名誉教授　㉕

疲弊しない栽培形態
日本の自然と調和する農耕

四大文明の発祥から少し遅れて農耕文明に参加した日本では、豊かな自然と調和する形で農耕が行われてきた。初期の農耕はすでに縄文時代から始められていたようである。

旧石器時代から栽培

最近、小畑弘己氏は縄文土器の圧痕として検出されたマメ類・雑穀やコクゾウムシの痕跡から、日本人は既に後期旧石器時代（16000～7300年前）から有用植物の栽培を開始していたことを明らかにした（「タネをまく縄文人　最新科学が覆す農耕の起源」吉川弘文館、2016）。

縄文時代草創期～早期には、アサ・エゴマ・ヒエ・アブラナ科などの繊維用と食用作物の栽培を開始、縄文時代前期（7300年～5500年前）にはマメ類（小マメと大マメ）の栽培を独自に開始し、集落の安定化と人口増加をもたらしたと述べている。クリの栽培管理も同じ頃に開始されソバやイモ類も同様に縄文時代の重要な食料だった。

水稲栽培で集団移住

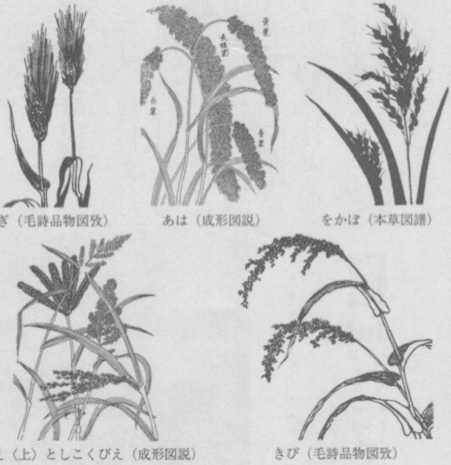
大陸系穀物（アワ・キビ・イネ、オオムギとコムギ）が朝鮮半島を経由して伝来したのは縄文時代晩期中葉～後葉（2860～2800年前）だった。そして、本格的な水稲栽培が一定規模の集団の移住を伴って到来したのは弥生時代早期以降（2800年前以降）だった。

日本でメソポタミアやインダス文明と匹敵する時代に作物栽培が開始されていたことは驚くべきことであるが、その文明が西欧におけるように土地の疲弊と農業中心地の移動をもたらさなかったのは、多様な作物を焼畑で小規模かつ複雑な形態で栽培していたためと推察される。

農産物の発生神話

古事記には、スサノオノカミがオホゲツヒメを殺し、その遺体の各所から蚕、稲穂、アワ、小マメ、ムギ、マメが出てきたという話があり、日本書紀にも同様にツクヨミノミコトがウケモチノカミを殺し、その遺体から牛馬、アワ、蚕、ヒエ、稲、ムギ、大マメ、小マメが出てきたという話がある。

古事記や日本書紀に描写されている時代はすでに水田稲作が行われた弥生時代に相当すると思われるが、アワ、ヒエ、ムギ、マメ類などの雑穀も稲と同様に重要な農産物


むぎ（毛詩品物図攷）
あは（成形図説）
をかぼ（本草図譜）
ひえ（上）としこくびえ（成形図説）
きび（毛詩品物図攷）

として扱われていたことがわかる。

古事記や日本書紀で食物を生産する神が殺されて、その遺体から各種の農産物や家畜が発生するという神話の原型は東南アジアに伝わるハイヌウェレ神話であると考えられている。インドネシアのモルッカ諸島セラム島に伝わる神話では、ココヤシの花から生まれたハイヌウェレという少女は、さまざまな食物を大便として排出することができたが、村人はそれを気味悪く思い殺してしまった。すると、その遺体からは各種のイモが生えてきたという伝説である。

日本の神話では穀類や家畜に変化しているが、同様のパターンである。東南アジアから日本に向けてのさまざまな食物の伝播と並行してこのような神話も伝えられてきたのであろう。日本の神話でもハイヌウェレ神話でも、死んで土に帰った生命が再び食物としてよみがえることを女神の死に託している。

シャーマンの口承

日本神話と東南アジアの神話の間にはさまざまな類似性がある。ミャンマー東北部のカチン族には人類の発祥から始まり現在にいたるまでの部族の歴史がシャーマンの口承によって伝えられている（吉田敏浩「森の回廊」、NHK出版 1995）。

それによれば人類はある時洪水によって滅ぼされ、ひと組の兄妹だけが生き残った。その兄妹から再び現在の人類が生まれたとのことで、旧約聖書や日本のイザナギ・イザナミ伝説とも類似する話となっている。

中国の雲南省・四川省、ミャンマー東北部、ラオス、タイ北部などを含む地域と日本の間には、雑穀類・茶などの作物、納豆やモチなどの食品、人々の生活・精神文化においても多くの類似性がある。このことから中尾佐助氏、佐々木高明氏らによる照葉樹林文化論が展開された。